

Vol.2
2011

これからのお寺を考える情報誌

みえら

特集：現代を生きる「尼僧」たち

故人供養だけではなく、お墓を生を問い直す場所に 臨済宗 妙心寺派 陽明山 實相寺
コンシェルジュのように、檀信徒の希望をお寺の方針へ 日蓮宗 宗門史跡 名瀬 妙法寺
演奏して描いて、お坊さんは街に出る 本命山 密蔵院 明光寺

“お寺カフェ”と親しまれる「神谷町オープンテラス」 浄土真宗 本願寺派 梅上山 光明寺



“よってら(寺)、みってら(寺)、みんなのお寺”

「寄ってらっしゃい、見てらっしゃい、 ここはみんなのお寺だよ。」

かっこつけないお寺づくり、みんなに愛されるお寺づくり、
がんばる元気なお寺づくり。
そんな愛されるお寺づくりをお手伝い。
それが『みんてら』です。

お寺は人々にとって、どんな役割があって、
どんな時にお寺へ足を運ぶのでしょうか？
お葬式をするところ？
盆彼岸にお墓参りに行くところ？
困ったときの何とやらで、願いごとをしに行くところ？
私は仕事でお寺さんとのご縁がなかったら、
きっと年に一度のお墓参りか、誰かが亡くなったときのお葬式、
いや、お葬式は今ではセレモニーホールでやることが多いので、
お墓参り以外ではきっと行かなかっただろう。

しかし、この考えはある住職さんとの出会いがあり、変わりました。
そこに行けば、待っていている人がいる。
いつも話を聞いてくれる人がいる。
「自分もそうだった」と共感してくれる人がいる。
気づかせてくれる人がいる。
—そんな住職さんとの出会いがあり、
私はすっかりこのお寺のファンになりました。
そしてこの日から、お釈迦さまのお話が大好きになりました。
仏さまのもとで仕事をさせてもらえることが幸せに思えるようになりました。
私は仏教徒です。日本人は外国人から無宗教の国と言われていますが、
私は仏教徒ですと、自信を持って言うことができます。
(これからの実行が伴いますが…)

仏さまのご縁を通じて、皆さまのお役に立てる様、
これからも『みんてら』制作に力をそそいで参りたいと思います。
ご協力頂きました、お寺さまには深く感謝の意を申し上げます。

平成23年8月

『みんてら』編集長





「覚悟」

男性中心の世界の中、女性という立場で仏門の道へ進むには、女性という宿命、子どもを産むことへのあこがれを捨てた、強い覚悟を感じました。男性の方はお寺さまのご子息だったりすると「いずれはお寺を継ぐもの」とご自身も、周りの方も考えているのではないのでしょうか。尼僧の方の場合は、人生のある時点で「自らがお寺を継ぐ」という選択を経験される場合が多いように感じました。

「観音力」

優しく微笑み受けて入れてくれる、話を聴いてくれ、気持ちを理解してくれる。そして時には、しっかりとさとしてくれる。いつも受け入れてくれると同時に、道を示してくれること。包容するだけでなく、次の一歩へ背中を押してくれること。慈しみと力強さをどちらも持たれているという印象が強く残りました。

この度の
尼僧さんの
話を聞いて

「いらっしゃいませ」

お寺ではじめて聞いた言葉でした。営利を目的としないお寺だからこそ、ごますりではなく、心から自然とあふれ出た「出会ってくれてありがとう」という思いの表れだったと思います。この一言の中に、すべてを包んでくれる優しさ、愛を感じました。当たり前の言葉なのかもしれませんが、当たり前のことを当たり前にやる、その実践を見た思いです。

みんてら Vol.2

CONTENTS

01 | 編集長ごあいさつ / 尼僧の皆さんに聞く

03 | **特集**
09 | 現代を生きる
「尼僧」たち

■ 人のお話を聞くことが、僧としての大事な仕事だと考えている

浄土宗 樞寺

■ 尼僧だから話しやすい話題もある、女性であることを否定しない

真言宗 智山派 蓮花院

■ 楽しさ、悲しさをみんなで共有することで、より多くの心を救いたい

浄土宗 君澤山 蓮馨寺

11 | 10年後のお墓をプロデュース①

故人供養だけではなく、お墓を生を問い直す場所に

臨済宗 妙心寺派 陽明山 實相寺

14 | 10年後のお墓をプロデュース②

コンシェルジュのように、檀信徒の希望をお寺の方針へ

日蓮宗 宗門史跡 名瀬 妙法寺

19 | 人の集まるお寺づくり①

演奏して描いて、お坊さんは街に出る

本命山 密蔵院 明光寺

22 | 人の集まるお寺づくり②

“お寺カフェ”と親しまれる「神谷町オープンテラス

浄土真宗 本願寺派 梅上山 光明寺

特集

現代を生きる

「尼僧」たち

宗派別男女教師数



「宗教年鑑 平成21年版」(文化庁編)
および「日本の統計2011」(総務省統計局)より作成

独身僧侶に対して、宗派から「婚活」支援が行われる時代になっている。少子化や家族意識の変化による後継者の問題は、仏教界でも課題の一つとなっている。住職が世襲されることが自然なことと考えられているだけに、「跡取りがない」ということはいっそうの悩みの種となっている。

しかし、本当に「後継者はいない」のだろうか？

生産年齢(15-64歳)人口の男女比は、総務省統計局が発行している『2011 日本の統計』によると、男性:女性の比率は、ほぼ半数ずつとなっている。データから離れたところでの実感としても、それほどこの数値には抵抗はないだろう。

さて、仏教界をかんがみて、各宗派ごとの教師数の男女比はどのようになっているのだろうか。図1は、文化庁が毎年発行している宗教年鑑の平成21年度版から作成した、仏教八宗の男女教師数の構成比のグラフである。

宗派ごとの数値を見ると、最も女性教師の比率が少ないのは臨濟宗妙心寺派で3.6%、次に曹洞

宗の4.0%となっている。逆に最も比率が高いのが、真言宗智山派の16.1%で、次に高野山真言宗の15.3%。少し離れて浄土真宗本願寺派と真宗大谷派が12.9%で並ぶ。宗教年鑑のデータはあくまで教師数であるため各宗派の僧と尼僧の割合と見なすことはできないが、各宗派の男女比の考察する参考にはなるはずだ。

上のグラフが示す通り、教師資格を保有する男女の比率は、どの宗派においても男性に大きく傾いている。つまり、「後継者がいない」という問題は、言い換えれば「(男性の)後継者がいない」という問題でもある。しかし、男性の後継者はいなくとも、女性の後継者はいるというお寺は少なくないはずだ。すると、廃寺か女性の後継者か、という2者択一を迫られる寺院は、今後ますます増えていくだろう。

今回の特集ではそうした状況の中、布教の第一線で活躍している尼僧たちの声を通し、男性優位の仏教界へと飛び込んだきっかけ、悩み、希望などを明らかにしていく。



人のお話を聞くことが、 僧としての大事な仕事だと 考えている

第24代 日比野郁皓住職
浄土宗 榎寺



Ⅲ フランスで仏教に会う

浄土宗^{かやでら}榎寺24代住職、日比野郁皓師が実家であるお寺の存在を強く意識したのは、昭和46年、大学を卒業した22歳の時のこと。その年、師の父が亡くなり、師の伯父でもある心行寺住職が、榎寺の住職も兼務することになった。

中学校から大学までずっと女子校で、大学も仏教学部ではなく、僧侶になろうとは考えていなかった。勤行などお寺のお勤めには慣れていたし、兄弟も妹だけだったので、「お寺を継がなくては」という気持ちはあった。自身が僧侶になることは考えていなかったし、お寺のために婿を取るという気持ちはまだ固まっていなかった。

師はお寺の長女として生まれたが、舞台演出家を志していた。大学では英文学を専攻し、フランスの劇作家モリエールの喜劇を中心とした劇団で、演劇を勉強していた。その方面への関心は強く、お寺の後継者の問題は残っていたが、大学卒業後フランスに留学する。

ところが、お寺の後継者という立場から離れたはずのフランス留学が、自分が生まれ育った環境を強く意識させた。異国の友人と話していても質問さ

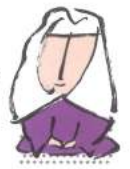
れるのが、「仏教」と「浮世絵」だった。フランスの演劇を翻訳して日本でやっているということには、ほとんど興味を持たれなかったという。

生まれ育った地から遠く離れた場所で、生まれた時から身近にあった仏教の意味を考え直させられた師は、自分が求めているものがもともと自分の近くにあったと感じた。「お芝居の世界とお寺の世界は、とても遠いところだとそれまで感じていた。しかし、舞台という表現の世界に引かれていたということは、心の世界に引かれていたということ。仏教の世界は、心の世界にとっても近い。」

帰国後、伯父に僧になりたいという気持ちを話すと「伯父は『それは良かった』と大賛成してくれた」とその時のことを語る。僧侶資格を取得し榎寺に帰ると、伯父がそのまま住職を兼務し、師は責任役員、つまり副住職の座に付いた。

「伯父は自分がすぐに住職になると思っていたようだが、資格は取得しても、檀家さんの状況などがまったく分かっておらず、しばらく知識を身に付ける必要がある」と感じ、師は昼夜法要や施餓鬼法要など、近隣のお寺に出掛け修行を積んだ。

師が住職になったのは、53歳になってから。ただ、それほど大きな変化は感じなかったという。「大



法要の時に伯父が中心に座っていたのが、自分が座るようになったというくらい。住職になったことを檀信徒の皆さんがすごく喜んでくれたことは、鮮明に覚えている」と振り返る。

|||| 尼僧としての生活

「仏教の中には、『女性は男性に生まれ直して悟りを得る』という教えがあるが、実際は、それほど性差的なものはなかった」と語る日比野師だが、檀信徒との関係では不安もあった。

「日本にはケガレという思想があり、葬儀に行ったら塩をまいたり、女人禁制の分野などもある。自分がもしお寺を継いだ場合に、そうした問題をどうするかはずっと考えていた。それも住職になることを決心する時には、不安も消えていた」という。

「当時は葬儀も大人数が多く、複数の僧で行っていた。男性の僧侶に囲まれて葬儀に行くと、私が導師とは思わず、同行している男性僧侶に『先生、先生』と話し掛ける、というようなことはあった。」と語る。男性と同じように読経できるように声を太くしたり、低い声を出す訓練も行った。

一方尼僧としての利点として、「女性の方が話しやすい」ということは師も強く感じている。

「尼僧の方が相談しやすいということは、はっきりとある。私の仕事は、お話を聞くこと。お聞きしたことは、誰にも喋らない。それが最も大事な仕事だと思っている」。

また、榎寺にお参りにくる年齢層が若いことも、そうした相談のしやすさから来ることだという。「火葬場に出ると、普段出てこない若い子とも合う。彼らに『お寺にも来てね』と伝えると、今度行ってみようかなということになる。

お墓にお参りして、一緒にお茶を飲んでお話する。そうして、ご先祖様のお墓に水を掛けることの気持ち良さを経験する。特に江戸時代からなど長いお付き合いのある檀家のお子さんだったりすると、自分に恋人ができた時などに、連れてきてくれることもある」という。

後継者の問題ははずっと考えていたというが、「お

寺の仕事も国際活動の仕事も楽しかったし、これまで恋愛はしたと思うが、結婚してこうしなければいけない、というのからは解放されていた。妹に娘が生まれた時に『これで跡継ぎができた』と結婚のことは考えなくなった」という。

|||| これからのお寺

「お寺の夜の時間を使って、心を見直すために本堂で過ごしてもらうなど、働いている人向けのイベントをやっていきたい」と師は語る。「昼間にイベントをやると、やはり高齢の参加者が多くなる。若いうちからお寺に親しんで欲しいという思いがある」という。

そうした思いを強めたのが、今回の震災だ。「地震が1つのきっかけになったと思うが、眠ったような生活ではなく、自分の生を大切にするきっかけは提供できたと思う。私の年齢になると生の大切さに気付くとは思いますが、もっと若い時に気付いてもらいたい」と話した。





尼僧だから話しやすい話題 もある、女性であることを 否定しない

真言宗智山派蓮花院
富岡宥心副住職



III 家族のために仏門に入る

「結婚しても副住職としての仕事はずっと続けていく。一生、僧侶でいたいと考えている」

そう語るのは真言宗智山派蓮花院の副住職、富岡宥心師だ。父である住職を助ける形で、同院の法事などを一切に引き受けて寺を盛り立てる。

師が僧侶の道に進む決心をしたのは、23歳の時。3人姉妹の三女として育ったが、姉が結婚して主婦としての道を選びたいという話を聞き、「それなら私がこのお寺を継ごう」と決心した。

師にはその当時、お互いに結婚まで考えていた恋人がいた。ただ、お寺のことをやると決めたからには全力でやろうと決めていた師は、恋人に「お寺を継ごうと思っているのだけれど、僧侶になって一緒にお寺のことをやってもらえたら、すごく嬉しい」と相談した。「僕にも将来の夢があるので、今の仕事を続けていきたい」という答えを受けた師は、僧侶としての人生と、恋人との人生の岐路で悩みつつ、尼僧として生きていく道を選んだ。

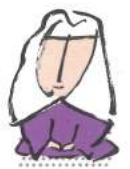
師は23歳のその選択の時まで「自分が僧侶になるとはまったく考えていなかった」という。大学を卒業して1年間は、アパレル関係の接客業に就いて

いた。実家がお寺ということで、高校生の時に進路で悩んだことはあった。姉に相談すると、「誰かが継がなければいけないとしても、私が継ぐから大丈夫だよ」と言ってくれたという。ただ、姉たちが結婚して生活も落ち着いているという話を聞き、「それならまだ結婚していない私がお寺を継ごう」と決意した。

お寺を継ぐ最も大きな動機については、「はじめは家族を守るためだった。住職がいなくなったら、寺族はそのお寺から出なくてはいけない。生まれ育った実家がなくなってしまう。当時は祖母もいたので、家族のすみかは絶対に守らなければいけないと強く感じた」と話す。

幼いころから住職である父の姿を見て育ち、お寺の手伝いなどを熱心にやっていたという師だが、実際に自分がお寺を継ぐことを決意するまでは仏教に関する知識は少なく、般若心経さえ読めない状態だったという。

僧侶の道へ進むことを決心した師は、「私がお寺を継ぎます」と父である住職に伝え、「お寺を継ぐからにはお婿さんを取って任せただけではなく、私も出家してお寺の仕事をやっていきたい」と住職に願い出た。その時24歳、真言宗智山派の僧侶養



成学校である専修学院に入学、1年間の修行を経て卒業後は蓮花院に戻り、副住職として寺務を始めた。

感謝の言葉を糧に天職の確信を得る

葬儀は住職と2人で行うが、法事については師にすべてが任されている。最初こそ「家族のため」という理由で始めたが、僧侶としてのモチベーションは年々高くなっているという。

「最初は出家しても『自分でいいのだろうか』と悩むことも多かった。今も悩むことはあるけれど、『自分でいいのだろうか』という悩みは消えた。法話などを通して「救われました」と言ってくださる方の笑顔に触れたり、感謝の手紙を頂くことで、日々やり甲斐を感じ、天職だと思うようになった」という。

「もし結婚したとしても、その方を盛り立てサポートする形で、僧侶として一緒にやっていきたい。男性の場合は、女性が寺族としてパートナーのサポートをすることが多いけれど、なかなか逆のパターンは難しい。檀家さんからも『宥心さんはいつ結婚するの?』と言われてたりもするが、今では『宥心さんが継げばいいんだから、結婚しなくてもいいよ』と言われることもある」と笑う。

尼僧の強みを生かす

「僧侶として寺務を始めた当初は、『本当にお寺を継げるのだろうか』という眼差しはあった」と当時を振り返る。寺報や掲示板での広報活動、法話などを通して、少しずつ「ちゃんと勉強してがんばっているのだな」と檀信徒から思われるようになり、「ありがたい話を聞かせていただいて嬉しい。あなたが副住職でよかった」ということを言ってもらえるようになった。

ただ今でも、尼僧だと分かれると、横柄な態度で接

してくる人もいる。師の友人には、「なんだ、尼さんが来たのか」と言われた尼僧もいるという。

しかし、女性であることで、コミュニケーションしやすいということも、師は感じている。

「水子供養の相談などで『女性の方に供養してもらえとは思っていなかったの、このお寺に来て良かった』と言われることもたびたびある。

水子供養に来られる方は、お1人の方とカップルの方を合わせて、9割は女性。男性も悲しまれているのはもちろんだが、お子さんが身体に宿って、そして離れてしまったという悲しみを、女性は身をもって体験されている。尼僧の方が安心というか、心を許して悲しみを打ち明けやすい」という。

日常の檀信徒との付き合いでも富岡師が若い女性の僧侶ということで、相談しやすいということはある。「お檀家さんより年下なので、気軽に質問できる相手と思ってくださっている。父である住職は大学を卒業してから、40年間以上ずっとお寺を1人でやってきたので、折り入っての相談は住職が頼りにされている。私と父、それぞれ役割があって、それでお寺も上手く回っている」と語る。

「お経や祈祷の時などは、男性の高さの声を出すようにしている。そうした点では、仏教界は男性中心と言えるのかもしれない。ただ、尼僧としてやれることをやる。女性であることを否定しても、女性でなくなることはできない。今は剃髪しているけれど、子どもができたら、子どものために伸ばすかもしれない。僧侶としては『男女は関係ない』と言うことができて、相談される方からすれば、尼僧の方が相談しやすい話題はある」という。

「理想とする僧侶は、場面に応じた対機説法ができ、より多くの人を救うことができること。私を頼って何度も来てくださるのも嬉しいことだが、最終的には1度の出会いで苦しみなどを癒やせる力を身に付けることができれば、と思っている」と将来の目標を語った。





楽しさ、悲しさをみんなまで
共有することで、より多くの
心を救いたい

浄土宗君澤山蓮馨寺
掬池郁晃師



心理学の限界と仏教への気付き

「人の心を救う職業に就きたいとずっと考えていた。それで心理学を勉強したが、慣れ親しんでいた仏教が、人の心を救うために、いかに優れたものであるかということにある日気付いた」と尼僧になったきっかけを語るのは、浄土宗社会国際局で働きつつ、生家の浄土宗蓮馨寺の寺務もこなす掬池郁晃師だ。

師は姉と双子の妹の、3人姉妹の次女としてお寺に生まれた。生まれた時から仏教の中で成長したことで、「仏教の存在はとても自然なものだった」と話す。

しかし、将来の進路として僧侶への道を選んでいたわけではなかった。人の苦悩をどのようにすれば癒やすことができるか、ということへ強い興味を持っていた師は、大正大学で臨床心理学を専攻する。だが、心理学を勉強すればするほど、心のあり方を「原因」と「結果」の方程式として探求する心理学に限界を感じるようになった。

「本当に心理学は、人の悩みを解決し、心を楽にすることができるのか」。そうした疑問を抱えていたある日「あまりに身近にあり過ぎてその価値に気付

かなかった仏教が、どれだけ多くの方の心を癒やしてきたか」ということに気付く。

師は大正大学で僧侶の資格を取得、尼僧としての人生を始めることになった。

性差を意識せず、個人の特性を生かした布施を

「お寺を継ぐことには、不安を感じていない。自分が理想とするお寺にどれだけ近付けることができるか楽しんでいる」と師は現在の心境を語る。

僧侶になった直後は、「お寺は男性が継ぐものという考えは根強いと思っていたので、不安はあった」が、今では「私が亡くなったら、あなたにお経をお願いするよ」と檀信徒から頼りにされるようになっているという。

仏教界における男女の関係については、「確かに男性が多い世界だが、男女の差を意識することはそれほどない」という。「着替える場所をどうするかといった問題はあるが、男女の差を変に意識するよりは、それぞれの僧侶が、自分が得意なことをやるのが最も良いのではないかと師は語る。師が若い女性ということで、檀信徒が接しやすい面も



同時にあるようだ。

後継者の問題などについては、それほど意識していないという。「お婿さんに自分の代わりにお寺を継いでもらいたいということは、あまり考えていない。もし結婚して子どもができたとしても、一生僧侶をやっていくと思う。具体的なお話が進む前から、そうした不安にとらわれても仕方がない」。

Ⅲ お念仏の会を通して距離を縮める

檀信徒との距離を縮めることになったきっかけの1つが、師が4年前に始めた「お念仏の会」だ。「年忌法要といった普段の行事だけだと、どうしても大勢の方に話し掛ける形になり、伝えきれないことも出てくる。僧侶は一人一人に向き合うことが大事だと考えているので、大勢に語り掛けるのとは違った形で、檀信徒の皆さんと接する機会を作れないか」という思いから、お念仏の会は生まれた。

お念仏の会の開催は、月に1回。日常の出来事をテーマとした仏教説話、瞑想の時間、念仏の唱和などの日常勤行に時間が当てられている。その後はみんなでお茶を飲みながら車座になり、一人一人が自分のことを話す時間だ。計約2時間の行事だが、毎回30名弱の人が集まるという。参加者には常連も多いが、常連が自分の友達へ会を紹介などすることで、初めての参加も毎回数人いる。

「旦那さんを亡くされたお話などされると、同じような体験をされた方から『私も同じような体験をした。つらかったね』と共感の声があがる。似たような思いをみんなでシェアすることで、それぞれの心が癒やされる」という。

今回の東日本大震災でも、お念仏会のような、地域の小さなコミュニティの重要性を感じている。

「本震発生から2週間ほどの時に、お念仏の会

があった。今回の震災で心を痛めている方は多い。特に高齢者の方は、テレビで震災の情報をよく知っている方が多く、地震や放射能への不安、また被災者の方の状況へ同調する気持ちで、沈んだ気持ちになられている。そうした時に、みんなで震災への感情を吐き出したり、祈りの感情をシェアすることで、心が救われる」。そうした少人数で実際に対面してそれぞれの感情をお互いに共有する活動をもっと地域で広げられないかと模索中だという。

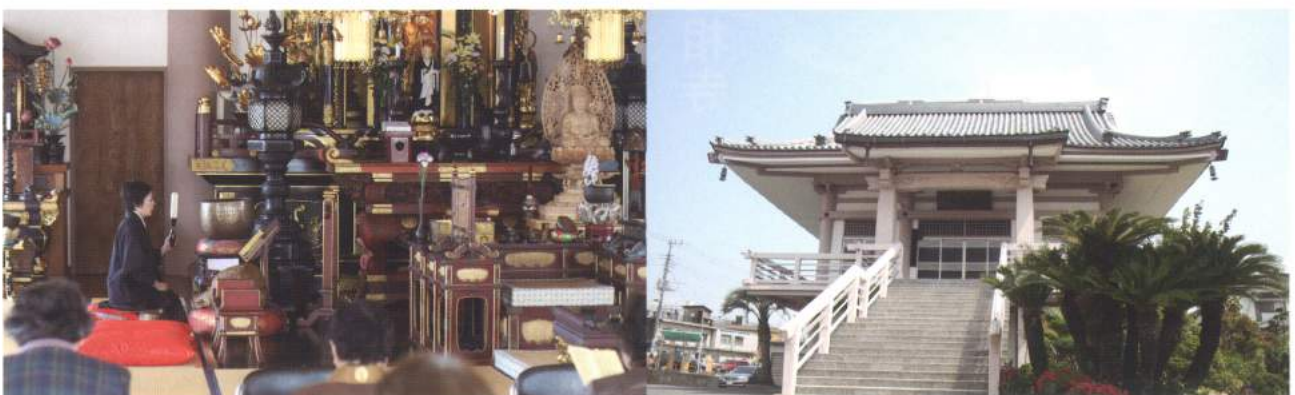
Ⅲ みんなの笑顔があふれるお寺を目指す

同世代の友人などからは、師から仏教的な話を聞きたいという要望が寄せられている。その声に応える形で、友人が経営しているアートギャラリーで行われた「尼僧さんのおはなしと本格台湾茶席の午後」というイベントにも参加した。会場では、イベント会場の同年代の女性たちと台湾茶を飲みながら、仏教的な話を含め、さまざまなテーマで話し合った。

「お寺でのイベントと同時に、お寺の外へ自分から踏み出すことも大事。外に向かって歩いていけば、仏教の教えが届く範囲を広げることができる」という。

師が理想とするお寺の姿は、「シンプルかもしれないが、みんなの笑顔があふれるお寺」。同院では年に2回、法要の後にバーベキューを行っている。子どもから高齢者までみんなで準備を行い、一緒に楽しむ。

「父でもある住職から受け継いでいる考え方が、楽しい時間をみんなでシェアすることはとても大事なこと。出会いの1つ1つを大事にすること、そうした積み重ねが大事なのではないかと師は話した。





10年後のお墓を プロデュース

① 臨済宗 妙心寺派

陽明山 實相寺

② 日蓮宗 宗門史跡

名瀬 妙法寺



第20代山本文匡住職

故人供養だけでは
なく、お墓は生を
問い直す場所に

臨濟宗妙心寺派
陽明山實相寺



「生まれ育った土地で、子どもや孫に見守られながら亡くなる人生のあり方は、もはや崩れている。それに伴って供養の担い手も、血縁から仏縁へと移行しつつある。そうした時代にふさわしい『お墓』のあり方を目指していた」

そう語るのは臨濟宗妙心寺派實相寺第20代住職、山本文匡師。高松の街を一望する形でそびえ、ハイキングコースの名所としても知られる日山。その麓の、涼やかな竹林を背に、同寺の生前供養墓「無縫塔」は静かに佇んでいる。

無縫塔が完成し落慶式を行ったのが平成22年11月のこと。師が住職に就任したのは平成20年11月だが、晋山式の計画過程で平行して無縫塔建立を提案し、平成21年4月、総代会や花園会総会において建立が正式に決定された。

永代供養墓の建立は、住職が若い時からの悲

願でもあった。そのきっかけは今から15年前、まだ師が副住職として寺務を果たしている時だった。檀家の中に、1人暮らしの高齢者の女性が2人いた。1人には子どもがおらず、近くに身寄りもなかった。またもう1人も子どもはいたが一人娘で、遠方に嫁いでしまって地元には身寄りがいなかった。そのため2人とも将来の墓について悩みを抱えており、師に相談した。

師は永代供養墓の必要性を強く感じ、その建立を訴えたが、当時はまだ平成元年に新潟県の妙光寺が建立した「安穩廟」が多少話題になっていた程度で、一般にはその必要性が認知されておらず、住職や総代を説得することができなかった。

その時から10余年が経過した。時代の流れは少子化や後継者問題をより明確にし、住職が30歳の時に抱いた憂いは現実となっていた。永代供養墓の必要性は誰もが認めるものになり、建立の機縁は熟していた。

■ お墓を死後の場所から命の場所へ ■

長年、永代供養墓のあり方を熟慮し続けた住職は、建立する供養墓は単なる納骨の場所としてではなく、命のあり方を見つめ、自分の人生を問い直



す場所にすることを目指した。

住職は無縫塔を、「永代供養墓」ではなく、「生前供養墓」と位置付けている。永代供養墓に申し込みを行う一般的な理由の1つに、「遺骨をどう扱っていいか分からない」というものがある。肉親が亡くなったが個別の墓が用意できていない、親せきが亡くなって遺骨が急に手元に来た、という場合に扱いに困った遺骨を預けられる場所としての永代供養墓だ。住職は遺骨を預かり永代にわたって供養することの重要性を理解しつつも、「単に遺骨を預かるだけではなく、無縫塔の縁を通じて自分自身の死を見つめ、より良い老後、より良い人生を生きるきっかけとして欲しい」という思いを持っている。そのため無縫塔は、生前の申し込みを原則としている。それは亡くなってはじめて仏縁を結んで貰うのではなく、生きているうちから仏縁を結んで貰い、仏教や禅の教えを人生の糧として欲しいという住職の思いの表れでもある。

また、できるだけお寺の敷居を高くしないように、無縫塔への申し込みは同寺の檀家となる必要をなくしている。無縫塔の申し込み者は同寺の檀信徒会である實相寺花園会の「サポーター」という位置付けが与えられる。サポーターは年会費の支払いは各人の自由に任せられているが、同寺で開催

される行事の案内や毎月の会報など、情報の提供は正会員と同様に行われる。

「できることをできる人がやる、それぞれのあり方でお寺にかかわる。仏縁は身近な存在でなければならないが、軽んじられてもいけない」と住職は語る。永代供養墓を造った場合、檀家と永代供養墓へ申し込んではお寺へ縁を持った人では、お寺に対する思いに温度差がでがちだ。自然と2つのグループに分かれその間に溝ができてしまうことも多いが、住職が永代供養墓の申し込み者だけで新しいグループを作らず、花園会のサポーターと位置付けたのは、そうした理由もある。

「正会員とサポーターを2つのグループに分けてそのグループ間に接点を作るのではなく、寺を中心とした同心円として正会員とサポーターをイメージしている。その円の中で外側から内側へ、内側から外側へという移動はあってもかまわない」という。

サポーターは寺院へのかかわりが強制されるわけではないが、「自分がいずれ無縫塔に入るからには綺麗にしておきたい」と自ら考え、清掃活動を行う人もいるという。生前に申し込んだ人は、自然と自分の死後のすみかを見つめることになり、またそこに入るまでの生のあり方を考えることになる。既に亡くなり納骨されている人へ思いを馳せ供養の心が生まれると同時に、自分が死後どのように供養されるかということも考えざるをえない。その時、命の連続性を実感するのではないか。「生前供養





子育地藏菩薩像



自然に溶け込むデザイン

墓」という名称には、住職のそうした願いも込められている。

同寺ではより良い生き方を考える実践的なきっかけとして、さまざまな催しも行っている。昨年秋の総供養では行政書士を招き、遺言についてのセミナーを行った。今年も行政書士による生前見人制度やエンディングノートの説明や、主任介護支援専門員による、「介護予防の基礎知識セミナー」を行う予定だという。その後に布教師でもある住職自らが法話を行うことで、物質的な面と精神的な面の両方から、より良い老後を送るための支援を行う。今後もさまざまな講演会を行っていく予定で、住職はこうした活動を「みんなの寺子屋」と名付けている。学問という知識の教授は学校制度が担うようになったが、本来の寺子屋にあった「生き方の思想」を身に付ける場所としてお寺を位置付け、充実した生と死を対象としたお寺での新しい学びだ。

■ 「自然」という終のすみか ■

住職自身もいずれは無縫塔へ入ることを公言しており、既に住職の亡き母も無縫塔に納骨されている。建立の際には、「外側から無縫塔を見るだけ

ではなく、無縫塔の中から外の環境を見る」という視点も重視した。「住職自身も入りたいと思えるようなお墓でなければ、ほかの人がどうして入りたいと思ってくれるだろう」と語る。無縫塔のデザインコンセプトは「自然に帰る」こと。良質の庵治石は原石の形をそのまま生かした、卵型に近い柔らかなフォルムだ。同寺は豊かな自然環境の中にあり、その風景の中で無縫塔は人工物という印象をほとんど与えない。

無縫塔のシステムも「自然に帰る」という理念に沿って作られた。納骨してから2年間は塔内の納骨堂で個別に遺骨が安置されるが、その期間が過ぎれば合祀となる。

永代供養墓の中には、三十三回忌など、遺骨の長期個別安置を選択肢として設けているところもある。それに比べると2年という期間はとても短い印象だ。その点について住職は、「遺骨を保存するということが重視されがちな永代供養墓だが、「土に帰る、自然に帰る」こともお墓の大事な役割であることを忘れてはいけぬ。人はそもそも自然の一部であって、自然に帰ることは当然なことだ。お墓は異界の入口であり再生の場でもある」と語る。

広々とした境内





久住謙昭住職



コンシエールの ように、檀信徒の 希望をお寺の方針へ

日蓮宗 宗門史跡
名瀬妙法寺

■ 檀信徒の声から始める ■

「住職としてお寺の運営を行う立場になった時に、まずやるべきことは『檀信徒の皆さんの声を聞くこと』だと思った。『永代供養塔ができましたので、利用してください』ではなく、要望があって応えていった結果、永代供養塔がきちんと整ったということ」。多くの遺骨を納められる永代供養塔への改修を行った理由として、日蓮宗妙法寺住職の久住謙昭師はそう答えた。

師が住職になったのは平成19年4月、31歳の時だった。先代住職の急逝で若くして住職となった

師は、住職として初めての寺務として、檀家に対して自由記述式のアンケートを行った。家族構成や職業といった基本的情報の記入をお願いすると共に、お寺への要望、意見、苦情など、お寺に対して感じていることを自由に記述する形式を取った。

各種の仏教団体でも積極的に活躍していた住職は、お寺を盛り上げるためのさまざまなイベント案を持っていた。しかし、「数年の間はアンケートで多かった回答に1年に1つずつ応えたお寺の運営をやっていく」と決意していたという。

希望として最も多かったのが、「境内にトイレが欲しい」というもので、その年のうちに境内に洗面所を新設した。回答のうち次に多かったのが、「お墓の後継者に将来の不安を感じている」というものだった。アンケートの回答者のうち、1割がお墓の継承において将来の不安を感じていた。記入された家族構成から見ても、檀家の1割以上はこのままだと無縁になる可能性がある、という状況だった。先代の時代に造られた納骨塔も、少子化や核家族の増加という現代を反映し、満室の状態になっていた。

■ 暖かな永代供養塔 ■

昨年11月に改修を終え、約800体の遺骨を個別に安置できるようになった同院の永代供養塔の原型は、先々代住職が世界全体の霊や水子供養などさまざまな霊を供養するために昭和56年に建立した観音像にさかのぼる。

住職の父でもある先代住職はその観音像にカロートを併設し、永代供養塔としての役目も持たせた。先代住職が常日ごろから口にしてきたのが、「永代供養は、寂しく、悲しいものではありません。私もいずれはこの供養塔に入ります。そのため、無縁にはなりません。だからみんなで入りましょう」という言葉だった。実際に先代住職の遺骨は分骨され、永代供養塔の中に檀信徒の遺骨とともに安置されている。

「母の遺骨も永代供養塔に安置しているし、私自身も同じように永代供養塔に入ることを決意している。歴代の住職がそこに入るならば、将来の住職も永代供養塔を粗末にすることはなく、寺全体として永代供養塔をきちんと守り続けていく証明にもなるだろう」と住職は語る。

永代供養塔の改修に当たっても、住職は先代住職や自分がどのような所に眠りたいか、つまり実際に利用する立場の人がどのようなところに眠りたいのかということをもっと重視した。

「永代供養塔には、内部に白い遺骨がずらりと並んでいて、暗くて陰気でおどろおどろしい、と思われるかもしれない。そうしたイメージを払拭して、次の人生で住むならこうしたところがいい、と誰もが思ってくれるような、明るくて綺麗な終のすみかにしたかった」と住職は語る。

ロッカー式の納骨壇が並ぶ永代供養塔2階の天井は、光をふんだんに通す色付きのガラスで、内部まで明るい光が差し込んでいる。納骨壇のそれぞれの扉は大理石から作られていて、名前などを刻むことができる。中にはハートマークをアレンジした紋章を刻んだものもあり、故人の生前の姿と、故人に向けた遺族の思いをうかがわせる。

「納骨室にあまりにふさわしくないものは遠慮していただくが、最大限、利用者の要望に応えるようにしている。生前に申し込んだ際などには、夫婦と

その子どもが来て、『お父さんたちには、どんな模様が似合うと思う?』という会話をしていたこともある」という。個人だけではなく、夫婦や家族用のカロートもあり、さまざまな要望に応じることができる。

永代供養塔の1階は骨壺を並べる形で遺骨が安置できるため、多くの人々が利用できる。金銭的な面で境内のお墓や、ロッカー式の納骨壇を購入するのが難しいという人を、特に対象としている。困っている人には、「費用は出せるだけでいいので安心して欲しい」と伝えているという。位牌堂は別があり、位牌のない方は過去帳に名前をまとめている。無縁の人にも、生きた証を妙法寺にずっと残せるように配慮されている。

永代供養塔を守る観音像も慈母の像で、温かいイメージのピンク色の石を使っている。永代供養塔は本堂のすぐ横に設置されていて、同院が面する大通りからもよく見え、また同院の前にあるバス停などから見上げると、まず目に入る位置になっている。そうした注意を引きやすい位置であることもあり、寺を訪れる檀信徒の中には、自分の家族が入っているわけではないのに観音像に塔婆をあげたり、線香をあげたりする人もいるという。

「永代供養塔とはいっても、誰からもお参りされたいのは悲しく寂しいことだから、私たちが皆で供養していこう」という気持ちからだ。先代住職から住職に伝わる、「永代供養塔は個で守るのではなく、寺に関わるすべての人々で守っていこう」という思いが、檀信徒まで広く伝わっていることの表れだ。

■ 隠れたニーズが浮かび上がる ■

後継者がいないというアンケートの回答を契機とした永代供養塔の建立だが、実際に募集を開始



観音像にはお参りする姿が絶えない



慈愛の眼差しで見守る



像背面、柔らかく円を重ねた特徴的づくり

すると、さまざまな隠れたニーズが出て来た。息子がいたとしても、「息子の代には状況がどうなっているか分からないから、先に墓を購入する」という人や、息子に不安がなくても親子3人で一緒に永代供養塔を見に来て自分たちと息子の墓の3人分を予約する、という場合もあるという。その際にはさすがに「お2人が亡くなられてから、息子さんがその後のお墓の扱いについて改めて考えてもらえたらいいのでは」と話した。

寺院墓地にお墓がある人でも、「後継者に負担を掛けたくない」という理由から永代供養墓に遺骨を移すケースが、永代供養塔の申し込みのうち半分以上を占めるという。後継者300年以上続いた屋敷墓地はあるが、「娘はいるが関東に嫁いだから、お墓のことで迷惑を掛けたくない。自分の代で自宅のお墓は終わり」と境内のお墓を購入し、お寺の年間護持費の数十年分とその間の貨幣価値の変動予想分を一度に持ってきて、「私が亡くなっても先払いした間は、お墓の供養をお願いします。その後のお墓の面倒は、住職にお任せします」というケースもあった。

住職が永代供養塔で問題視していることの1つに、「永代供養塔は1度納骨したら、後はお寺に任せておけばいい」という風潮があることだ。遺族に配偶者がいない場合で、兄弟のうちどちらかが遺骨をお寺に持ってきて、その後は一切お寺に来な

い。無縁を出さないための永代供養塔が逆に縁を薄くするのを嫌い、「誰か連絡が取れる人がいるなら、年間の管理費5,000円は高くないと思うので、せめて年に1度はお寺に来て費用を私に手渡ししてください。そして、少しの間でもいいので手を合わせてあげてください」と伝えているという。

■ 安心のための永代供養 ■

お寺にとっての永代供養塔の位置付けについても、「誰にも供養してもらえないような無縁はなくしたいし、永代供養塔があるから安心して檀家になれるという面はある。ただ、永代供養塔を造ったらすぐに多くのお寺に来て、という風に考えているわけではない」と楽観はしていない。

「永代供養塔があることで、お布施を払えなくても、きちんとお寺で供養してくれると考えてもらえたらそれでよい。経済的に余裕のない方にもお寺の供養を利用していただけることで、失われた信頼を回復できないかということが永代供養塔を造ったことの目的の1つ」だという。

そうした考えから、同院ではお寺を訪れてもらうためのイベントにも積極的だ。今年は震災などに配慮して中止したが、桜が美しい季節には夜間のライトアップなど、季節に応じた試みを行うことで、気軽にお寺に来てもらうように工夫する。ただ、大きく

話題を集めるようなイベントに関しては、その是非を指摘する。

「お寺は公共の場であるから、ある程度の幅の人に認められる事をやるのが、本来のあり方。お寺は積極的に開放したいが、遠方から多くの人に来て、お寺に普段から接している地域の人が顔をしかめるようなイベントでは、本来の意味で成功したとは言えないのではないかと。またカルチャースクールなど、本来のお寺の業務からあまり外れるのも問題だが、逆に仏教的過ぎるのも問題なので、1つ1つの試みへの反応を見ながらやっていくしかない。

祭りを境内でやれば、お寺に人は来る。ただそれがお寺の開放かという、少し違うのではないだろうか。『今日はお寺に来て救われた』と思ってもらいたい。イベントで人がお寺に来ること、仏教が広まることは違うと思う」という。

■ 地域に密着したお寺本来の姿を目指す ■

「興福寺で行われた阿修羅展には合計で数万人が訪れた。その人たちは、美術品を見に行っているだけではない。手を合わせる気持ちは心のどこかにあってあれほど多くの人々の関心と呼んだのだろうが、彼らのどれだけがお寺を訪れたのか。仏教には期待しても、お寺には期待していないという現実を変えるためには、日常のお寺の活動を1つ1つ工夫して、誠意を持ってやっていくしかない」と住職は語る。

同院が頒布しているパンフレットにも、そうした工夫が見て取れる。「パンフレット1枚作るのに費用は掛かるが、有名なファッションブランドをイメージして作っている」と語る。

そうした地道な取り組みが関心を引いてか、同院にはさまざまな相談のメールが来るという。

「最初はインターネット上の仮名を使っている

人でも、真摯に対応していると、実際にお寺に来られ、すごく真面目な方だったりする。自覚している部分では気軽な気持ちだったとしてもお寺にコンタクトを取ってみようとする方は、やはり深いところでは真剣に物事を考えている方が多いのではないかと。

葬式に持っていく香典の封筒の表になにを書いたらいいか、という相談のメールが来たりもするが、きちんと返事を返している。小さなご縁にもきちんと対応していくことを続けていくしかないし、そうした身近な相談をできるのがお寺の本来の姿なのでは」という。

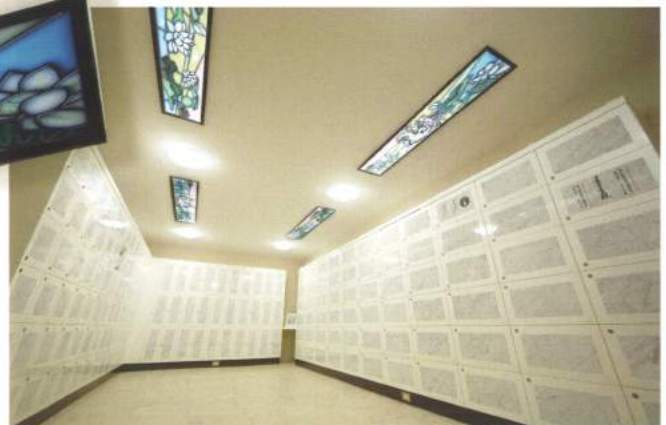
住職が目指す檀信徒への関係は、「高級ホテルにいるコンシェルジュ」。アンケートで把握できた檀信徒の家族構成などの情報は、檀家管理ソフトで一元的に管理している。葬儀の様子なども丁寧にメモしておき、話し掛けると、檀信徒の方も打ち解けてくれることが多い。目指すのは電話で声をお聞きしたただで「こんにちは〇〇さん。お父さまのお加減はどうですか」と話し掛けられるぐらいまでに、檀信徒と密着した関係を築くことだ」という。

アンケートを行う際には、「怖い部分もあった」という。ただ、「そこから目を背けたら駄目だと思った。こちらからコミュニケーションを取ろうとしなければ、知らない間に疎遠になって離れていくことになる」という思いが、その恐怖に耐えても、檀信徒の本当の声を聞くことを選んだ。

住職は檀信徒から帰ってきたアンケートに対して、すべて返事を書き、約2ヵ月の時間がかかったという。アンケートの3位以下には「法事の際に座敷に胡坐や正座で座るのはつらい」「ペットのお墓が欲しい」という意見が続いているが、今年には院内をリフォームし椅子で食事ができるようにした。また来年はペット用のお墓も建立する予定だという。



柔らかく光めいた永代供養塔の中





みんなのお



人の集まるお寺づくり

① もっとい不動 密蔵院 (本命山密蔵院 明光寺)

② 浄土真宗 本願寺派 梅上山 光明寺



東京・新小岩の駅前からバスに揺られて向かうは、もっとい不動 密蔵院。こちらの住職・名取芳彦さんは、ライブハウスで声明のステージに立つ、フリーマーケットでお地藏さんの写仏絵を描いて売る…。型破りな布教活動の源は、どこから発想されるのか。

「人は、教えられなくても面白いと興味を持てば自分で学んでいく。私はそのきっかけを作るだけ。仏教って、とってもスペクタクルなんですよ」と、楽しいお話が始まった。

演奏して、 お坊さんは街に出る

声明ライブ

もっとい不動 密蔵院
(本命山 密蔵院 明光寺)

住職が描いた写仏



名取芳彦 住職

海外メディアも注目の声明ライブ

新小岩にあるジャズハウス「チピー」で声明の定期ライブが始まったのは、10年前。毎月1回、お酒を飲みながら声明を楽しめる場所というのは、まだ日本でもここだけではないだろうか。国内のみならず海外の大手メディアからの取材もくるほど、注目を集めている。

「CBSやBBC、フランスのTV局も来ました。面白いことやってる坊さんがいるって、取り上げられて」と、飾らない笑顔で話すのは、主催者の、もっとい不動 密蔵院(本命山 密蔵院 明光寺)の住職・名取芳彦さん。

「大きな劇場での声明コンサートは年に数回しかなくて、告知もほとんどされていない。チケットがすぐ完売しちゃうほど、心に響く素晴らしいものなんです。ただ、一般の人にはなかなか聴く機会が



フリーマーケットにも出展



節分ライブ

ない。そこで、ここに行けばだれでも気軽に声明が楽しめる、という場所を作りたかったんです」

思いついたらすぐ行動。行きつけのジャズハウスに相談して、仲間の住職2人を誘い、さっそく衣でステージに立ち始めた。

「この寺はちょっと駅からも遠いしね、集客には駅前のライブハウスのほうが向いていると思った。仏教に興味がない人たちにも、肩ひじ張らずに音楽として声明を聴いてもらえればうれしいからね」

■ 僧侶とは仕事ではなく生き方 ■

密蔵院では、読経の勉強会やご詠歌の会、写仏の会、浪曲ライブなど、仏教に関わるユニークなカルチャーイベントを数多く催している。名取さんがこういった新しい布教のための活動に目覚めたのは、20年前、30代半ばのころだという。

もともと同院は明治時代以来120年間、住職不在の寺だった。名取さんが住職についたのは、実家の寺が兼務していた縁から。お寺の次男坊として生まれ育った名取さん。

「子どものころから、本堂にご飯あげてこいって言われて、なにも考えずにチンチンってお輪を鳴らしていた。住職の資格は持っていたけれど、仏様のこととかよくわからなくてね。当時はなにより結婚したくて仕方なかったの。そのためには経済的基盤。それで生活のためにここの坊守になったんです」

と言うほど、初めは仏教のことを深く考えていなかった。

しかし、“暮らしていければいい”だけの住職業は続かなかった。

「5年近く経ったころ、お盆の棚経で10分くらいお経をあげてお布施をもらってくるのが、たまたまなく

嫌になってきちゃった。偽善以外のなにものでもないって。気持ち悪くて仕方なかったんです」

僧侶とは、仕事ではなく生き方だ、と感じるようになっていったという。

「それからですよ、仏様とはなんだって。袈裟ってなんだ、寺ってなんだ、檀家ってなんだってね。いろんな本を読みあさり、講習会に行って、勉強を始めたんです。他の人の説は疑ってかかってたね。自分が納得できる核心を見つけたくて必死だった」

少し厳しい表情でそう言ってから、「根がマジメなんだね」と破顔した。

「それでね、ああ仏ってこう考えればいいんだって。本音として、自分のなかで立て直しができたんです」



■ 仏教を本音で伝えていきたい ■

名取さんが辿りついた、仏の捉え方。それは、釈迦は超人ではなく我々と同じ人間で、彼を悟らせた、自然の営み、人の優しさ、生命力、すべてに宿っている力こそが仏だという解釈。その力は、今も私たちの周りを取り囲み、気づくものには安らぎや勇気のスイッチを押してくれると。

「春風がそよいで、ああ気持ちいい、って感じたことや、小さいころおばさんが掛けてくれた優しい言葉。そういうものが釈迦を悟らせたのかもしれない。釈迦も仏であるけれど、そうさせたパワーも仏。我々にだって、そういう力は働いているし、釈迦と同じ感性を持っている。そこに気づけば、誰もが日々をもっと楽しんで生きていくためのスイッチを押すことができると思う。仏教はすごくスペクタクルで面白い。あらゆるものを取り込める。そう自分の本音で納得してからは、多くの人に仏教を広めていきたいと思えるようになったんです」

止めていく。“そうだよ、これが仏教なんだよ”と、そこで3分でも話ができればめっけものじゃない」

上から教えるのではなく、興味を引かせて、勇気や元気の「スイッチ」を仕掛けていく。

「夢のあることをしたいんだよね」。

名取さん独自の布教活動は、地道に壮大な夢に向かって歩み続けている。



■ イラストのお地藏さんに託して伝道 ■

いま、名取さんが特に仏教を伝えたいのは、閉塞感に悩む若い世代。ひとつの試みとして、若者が集まるフリーマーケットの路上に、自作の写仏を並べて販売している。『皆に好かれる人より皆を好きになれる人』『百パーセント正しいことはまず役には立ちません』などと、添えてある言葉は法話のタイトル。愛嬌のあるお地藏さまのイラストが微笑ましい。

「若者たちは“これも仏教なんすか”なんて足を



写仏の庭

ご詠歌の会





「お寺カフェ」と親しまれる 「神谷町オープンテラス」

浄土真宗 本願寺派の
梅上山 光明寺



もしもお寺にカフェがあったら…。

そんな意外性のあるおもてなしのサービスで、近隣の住人やビジネスマンたちに親しまれている仏閣がある。東京タワーにもほど近い都心のオフィス街、東京・神谷町。オフィスビルの狭間に佇む、浄土真宗本願寺派の梅上山光明寺を訪ねてみた。

■ 思いのほか安らげる墓石ビュー ■

地下鉄日比谷線の神谷町駅を降りてすぐ。梅の見事なことから、かつて三代将軍・徳川家光から「梅上山」の山号が贈られた光明寺がある。境内

には、手入れの行きとどいた庭木が配され、都心にいることを忘れさせてくれるかのような和やかな静けさが漂っている。

ここまでは一般的な寺社の風情であろう。

さて、本堂の階段を上がり奥に進んでいくと、墓地に向けて視界が開けるテラスに出る。その墓地にせり出した広々としたオープンスペースに、まさにカフェのようなテーブルやソファなどが置かれていた。

ここが“お寺カフェ”と親しまれている「神谷町オープンテラス」だ。

カフェといえば、眺望もポイントであるが、この眺めはパノラマのように並んだ墓石である。と聞けばミスマッチかもしれないが、どうしてどうして、このお墓ビューは、なにか御先祖様たちに見守られているようで安らぐ。色とりどりのお供えのお花もかわいらしく、温かい気持ちにさせられる。右手には隣接した寺社の本堂が借景になり、独特の雰囲気包まれていて新鮮な印象だ。

■ 僧侶手作りのお菓子でおもてなし ■

席数はベンチやソファも含めて約40。この日も、近隣のビジネスマンやOL、学生らしき人々が、持ち込みの弁当を広げたり、紙コップのコーヒーなどを持ち込んで寛いでいる。みんな常連だろうか、すっかり気心知れた様子で、気ままにそれぞれの時間を楽しんでいるように見えた。

カフェと親しまれながらも、有料で飲食をサービスしているわけではない。利用時間は平日の9時～17時。飲食の持ち込みは自由で、光明寺の門信徒の方々だけではなく、どなたにも開放している。特に春から晩秋の期間は、水・金曜の11時～14時に予約制でお茶とお菓子のおもてなしもしている。お菓子は「お坊さん監修・本日のお菓子」。光明寺仏教青年会の料理好きのメンバーが心を込めた手作りで、牛乳を使った嶺岡豆腐やわらび餅など、季節によってさまざまなお菓子でもてなす。事前の準備も必要なため、予約は前日までにメールで受け付け。商売ではないので宣伝もしていないが、口コミやテレビ、新聞に取り上げられて知れわたっていった。今では1日に平均70人ほどが来場している。

■ 若い視点が生んだ現代のお寺 ■

神谷町オープンテラスの始まりは、7年前。今では光明寺の執事を務める僧侶・松本圭介さんが、入門当時、本堂前のテラスの美しい眺めと雰囲気感動したこと。せつかくこんないいところがあるのならこの場所をもっとたくさんの人たちに知っていただきたい、いわゆるカフェのような雰囲気開放できれば仏教を身近に感じてもらえるのではいかと、おもてなしのサービスを思いついたのが



お寺カフェメニュー



嶺岡豆腐

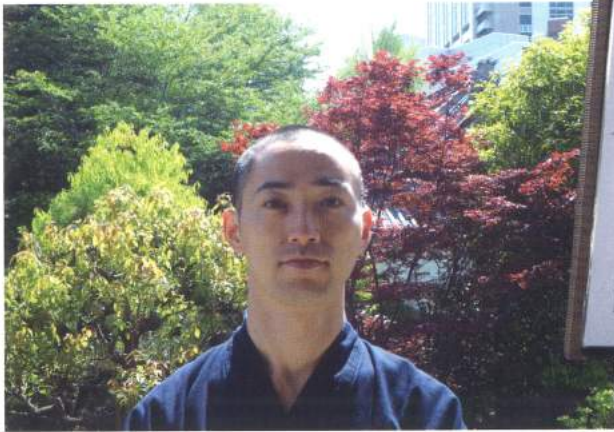


わらび餅

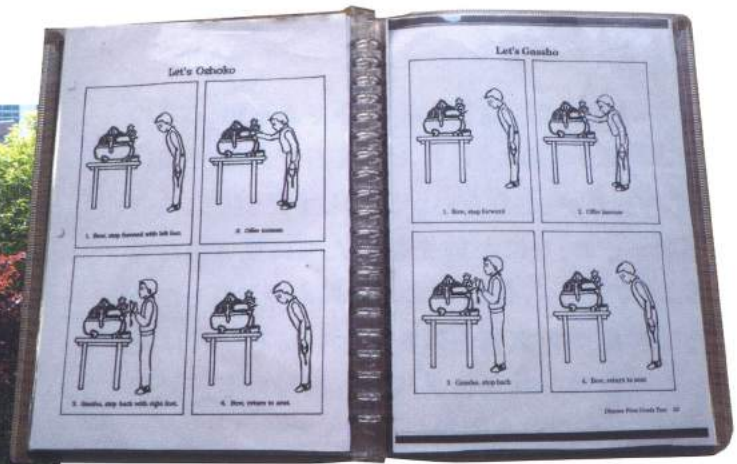
きっかけだった。また、松本さんは、光明寺での活動に関わる人や友人などと「光明寺仏教青年会」を立ち上げ、さまざまなイベントも企画。同会は、仏教精神に基づいた青少幼年の育成活動に尽力している個人・団体に贈られる「正力松太郎賞(全国青少年教化協議会主催)」の第一回受賞団体でもある。

松本さんは一般家庭に育ちながらも、国立大学を卒業後、仏教に興味を抱き、僧侶の道に飛び込んだという。彼の新しい視点が、仏教を身近にするアイデアを生み出している。そして、その若者の提案に賛同し寛容に見守り続ける石上和敬住職の功績も大きい。





木原 健師



メニューに英語表記でお焼香と合掌の手順

■ 来場者の協力で7年目を迎える ■

オープンテラスの店長を務める木原健さんも、もともとは松本さんの友人だった縁で仏教に興味を持ち、光明寺の僧侶となった人だ。フリーター等を経験した後、人のためになることをしたい、という思いから仏門を叩いたという。

「私は、仕事のことで悩んで、こちらでいろいろ話を聞いていただいたりしているうちに、自分もここでみなさんのお役に立ちたいと思うようになったんです」と丁寧に話す木原さん。

「ご先祖のお墓は遠くにあったり、お家にお仏壇がない方も多いかと思います。そういう方々にも、ここに気軽にいらして自然に手を合わせていただければありがたいですね」。

スタートから7年、ランチタイムに通う常連も多く、ここで顔見知りになって友人になった来場者たちも少なくない。「ここにいると、人の縁というものをつくづく感じます。遠方から何年も前の新聞記事を持っていらした方もいました」と木原さんは懐かしそうに振り返る。

震災の影響でこの春だけはおもてなし期間の開始日を遅らせたが、つつがなくオープンテラスには人々が訪れ、穏やかな時間が流れている。

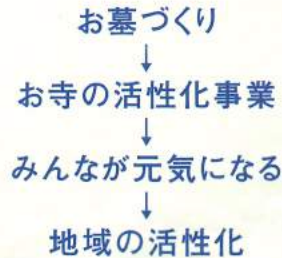
「こういった商売でもないサービスは、ちょっとしたことで継続できなくなるものです。無事、7年もの長い間続けてこられたことは、いらっしゃるみなさんの温かい思いのおかげですね。本当に感謝しております」。



みんてら[®]

川本商店が考える『みんてら』とは

お墓づくりをサポートして100有余年



弊社は、創業以来100年余りにわたって、お墓づくりをサポートして参りました。おかげさまで全国約100箇寺でさまざまなお墓づくり、お墓の演出のお手伝いをさせていただきました。

そこで得た経験から

これからのお墓づくり&お寺環境整備事業

例えば、今話題の永代供養墓もこれからの世代に向け必要な施設の1つです。しかし、永代供養墓を建てたからといって、本来のお寺と人々との密接なつながりがかつてのように戻って来るものではありません。

まずは、お寺に人が足を運んでこそ永代供養墓が生きてくるのではないのでしょうか。

「このお寺に行ってみよう!」「そうだ、お寺に行こう!!」「とりあえずお寺に行ってみようか」そんな身近なお寺づくり、それが弊社の考える『みんてら』です。

※みんてらは川本商店の登録商標です。

お問合せ お寺環境整備事業

みんてら事業部 TEL 048-254-2222

発行元 有限会社 川本商店

本社 〒107-0052 東京都港区赤坂2-21-1

川口営業所 〒333-0844 埼玉県川口市上青木1-7-4

TEL 048-254-2222 FAX 048-254-0888

WebSite <http://www.kanze.co.jp>

E-mail kawamoto@kanze.co.jp

『地域のためのお寺』とは、生活者のお一人おひとりの異なる思いに共感や有縁の出会いが生まれることです。永代供養墓や、お寺の資源を活かした施設づくりは、人々の集まる、魅力のあるお寺を『未来への序章』として構築することです。

ご住職の、素の自分を自然にふるまえる『対話の場』から始まり、新たな出会いとなり、ふれあいが生まれます。

お寺の復権は経済的自立とともに、新たなステージの時代に向かっていきます。

人々も『無縁から有縁』を求めるように、お寺にもその環境資源を活かした『未来への序章』を発信する良い時期だと思えます。

個性のある発信を専門のスペシャリストがお手伝いさせていただきます。

次号へつづく…

無 **縁** 有

かわもと

みんなてら事業部

川 有限会社 **川本商店**

創業100年 かわもとグループ
代表取締役 川本恭央

(有)川本商店

検索